✝

2025年

2月 第1・2週の主日礼拝説教要約

・2月　2日　ヨハネ福音書　3：1－15．

『信じる者の命』

・2月　9日　ヨハネ福音書　3：16－21．

『滅びぬ命』

衣笠病院教会　牧師　宮原晃一郎

≪　信じる者の命　≫～≪　滅びぬ命　≫

ニコデモというファリサイ人とイエスとの対話です。ニコデモはイエスの言動からして、この方（イエス）が神と共におられるのでなければ、説明がつかないと、“直感”します。

一方、イエスはというとこの人物の直感をあまり高く評価しているようには見えません。そもそもファリサイ人の大半はイエスから非難されても仕方のない者ばかり（偽善者？）のようです。彼らは“人の道”を説いているかと思えば、何事にも“時がある”とばかりに常に道に適った行いを実行しているわけでもなければ奨励していたわけでもありません。ただ、弁舌に長けていることもあり、他者に対する評価や巧妙な自己弁護で、ピンチをやり過ごしておりました。社会的地位のあるファリサイ人の中には、比較的イエスに近い立場に立つ者もいて、彼らの中にはイエスと会食をしたり、イエスのために、わざわざ“危険情報”を漏らす者も複数おりました。しかし、イエスの方からは、彼らにおもねることは一切ありませんでした。

さて、その夜の来訪者ニコデモの初対面の相手がイエスです。ニコデモはイエスが只者ではないことを直感して近付きます。その“直感”のレベルがどの程度のものであったかはイエスの反応を見るとよく分かります。

ニコデモはイエスに興味を示しています。この興味に対して、なぜかイエスは神の国の話を用いて、親切にも、応えています。

人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。
（ヨハネ福音書３：３）

神の国とは、境の見えない神の支配領域を意味しています。ただ単に、人が親から生れ落ちるだけでは、そこを垣間見ることも、そこに“入国”することもできない（３：５）ことを、イエスは教えます。この世の現実と照らし合わせるなら、実に多くの人々が、この神の国の“国外”に滞留していることがわかります。ただ、ファリサイ派のニコデモは、降って湧いたその話に対応する術を知りません。

年をとった者（ニコデモ自身）が、どうして…もう一度、母の胎に入って生まれることができるでしょうか。　（ヨハネ福音書３：４）

ニコデモは、イエスの不思議な神の国の教説に反応しているのではなく、むしろ、字義どおりに受けとめるしかなく、その言葉尻にしがみついているに過ぎません。残念ながらイエスの言説に触発されることもなければ、一かけらのイメージも湧かないことを暴露しているのです。けれどもイエスの親切心は、ここで途絶えたわけではありません、

誰でも、水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。　（ヨハネ福音書３：７）
風は思いのままに吹く。あなたは、その音を聞いても、それがどこからきてどこへ行くかを知らない。霊から生まれたものも皆、そのとおりである。　（ヨハネ福音書３：８）

思いのままに吹く風のごとく、イエスの口から出る一つ一つの言葉は、人が知りたくても知り得ない天上のことが無限にあることを伝えます。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである
（ヨハネ福音書３：１６）

つまり、人が親から生れ落ちただけでは到底知り得ない多くのことも含めて、御子（イエス）を信じる者は、神の国と永遠の命に与ると。
この時点では、救いの対象とはなり得なかったファリサイ派のニコデモに対しても、イエスは懇切丁寧に神の真理を説き明かします。彼がイスラエルの教師でありながらも知り得ぬこととして。

光（＝御子）が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した…　しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神にあってなされたことが、明らかにされるためである。
（ヨハネ福音書３：１９…２１）

預言者が故郷に容れられない（排除された）ように、人間は光よりも闇を好み、光を排除しようとしたこと、どんなに神が、彼らを導き入れようとしても人間は総じて敵対的な反応を示し続けたことが語られます。

詩篇では繰り返し“主を待ち望め”と、指揮者に合わせ、伴奏付きでも歌ったイスラエルは、しかし、人となりし“光の主”を拒み続けたのでした。むしろ、のちに抵抗なく神キリストを受け入れたのは、公然とそれを長年“待ち望んだ”ユダヤ人ではなく、その多くは異邦人でした。そして、彼らの闇を照らす光となったのも、世を愛された神の御子だったのです。

今から２０００年前に、光を拒み、闇を愛した多くの人々が裁かれてしまったのは、本人の行いによるものだった（自業自得？）とイエス・キリストは語ります。２０００年後の現在にも、裁かれている人とそうではない人が、おそらく混在しています。神の選別は、人の目には見えません。ただ、いずれにしても、御子イエスを信じている人々とそうではない人々が区別できるのだとすれば、人間はどちらに所属すべきなのかは、もはや言うまでもないことです。